公益財団法人朝日新聞文化財団2026年度事業計画

（はじめに）

2025年度の日本の実質ＧＤＰ成長率は1％程度、前年度を上回る伸びになると予想されており、引き続き景気は持ち直しの動きを強めている。ただ、1990年代から続いたデフレ経済からの完全な脱却まではなお至らず、その半歩手前の状態にある。

25年度の消費者物価は前年度比2.6％程度の上昇が見込まれ、実体経済はインフレ状態にある。日本銀行は25年12月に政策金利を0.75％に引き上げ、約30年ぶりの高水準となった。インフレや世界的な資金流入も背景に、日経平均株価は25年の１年で25％以上上昇し、史上初の5万円台に乗せた。26年に入って6万円をもうかがう過熱気味の水準で推移している。一方で、賃金の伸びは物価上昇に追い付いておらず、人口減に伴う労働力不足と設備の余剰もあり、日本経済全体では需要不足を解消できていない。

2026年の世界経済は、米トランプ政権による保護主義的な自国優先の経済政策の継続、ウクライナや中東、中南米といった地政学的な問題の拡大、バブル崩壊の影響が続く中国経済の動向などで成長の鈍化が懸念されている。そのなかで日本経済については、本格的な賃上げによる個人消費の回復などで所得から支出への前向きの循環メカニズムが徐々に強まり、成長軌道を維持することが期待される。ただ、ともすれば歳出拡大に向かいがちな政策選択が、債券市場や為替相場に悪影響を及ぼす懸念もあり、もろさも同居している。

当財団は、寄付金や協賛金以外の収入を求めて、資金運用による増収策にこの数年取り組んでおり、足元ではインフレに対する資産の目減り防止の必要性も一段と強まっている。

文化、芸術、学術活動を支援・顕彰し、良質な舞台芸術を提供する当財団の4公益事業を引き続き着実に遂行するとともに、金融市場の動向にも一層の注意を払いながら資産活用を行い、将来を見据えた健全な財団運営を引き続き行う。

（26年度事業計画の柱）

① 音楽会や美術展に対する芸術活動助成事業は、音楽、美術両分野で合わせて1,600万円規模の助成を行なう。

② 文化財保護活動助成では、現状の規模（平均で5,000万円内外）の年度助成を行なう。大型案件や大規模災害が発生した際にも、通常の助成と両立して支援できるよう、余資を活用した資金準備を行う。

③ 創設64回目を迎える大阪国際フェスティバル（OIF）は、前年度より一つ多い4公演を実施する。

④ 資産運用額の上限はこれまで、朝日新聞社から財団設立時に拠出された出捐金10億円の８割にあたる８億円を上限に定めており、25年度内に７億円超に達する見通し。インフレに対して運用で含み益を確保し、目減りを防ぐことが一層重要になっており、26年度から運用ベースを拡大し上限を10億円としたい。

（公益事業の内容）

１．音楽会、美術展覧会等の事業に対する助成（定款第4条１）

音楽祭、美術展覧会の開催等の芸術活動に対し助成する。2026年度実施事業の申請受付は25年10月25日に締め切り、応募は音楽158件（前年175件）、美術は109件（前年100件）の計267件(同275件)だった。選考委員会は25年2月3日（音楽分野）と2月12日（美術分野）に開催。計120件（音楽71件、美術49件）に1,561万円（音楽950万円、美術611万円）を助成する。新聞社からの寄付金に頼らず手元資金の運用益で先々の原資を確保し、引き続き安定的に事業を続ける体制を固める。

２．文化財の保護等のための事業･活動に対する助成（定款第4条2）

26年度の実施事業は25年7月初旬まで申請受付を行い、9月の文化財保護助成選考委員会で47件の申請の中から34件（新規19件、継続15件）に合計5,146万円を助成決定した。文化財保護や修復・公開の重要性を啓蒙普及するシンポジウム等のイベントで、朝日新聞社との協力開催も継続する。27年度分申請は26年6月ごろ受け付ける。

３．文化・学術等の向上に寄与した者に対する顕彰（定款第4条3）

優れた芸術家、研究者等を顕彰するため「朝日賞」を年度賞として贈呈する。近年の業績を主な対象に幅広く候補者を調査し、11月末から12月初めに朝日賞選考委員会で若干名選定する。

４．音楽会等の公演の主催（定款第4条4）

大阪国際フェスティバル（0IF）は第64回を迎える。26年4月に幕開けし、まず12年目となる大阪４大オーケストラの演奏会を開く。「4オケはおどる」をテーマにバレエ音楽や舞曲などを演奏する。5月は、作曲家渋谷慶一郎氏による「アンドロイド・オペラ『ＭＩＲＲＯＲ』」を大阪初演する。ＡＩを搭載したアンドロイドの歌、生のオーケストラ、ピアノ、電子音楽、映像、高野山の声明が融合する。9月には、牧阿佐美バレエ団創立70周年の新作「こどものためのバレエ『シンデレラ』」で、4歳以上から親子で楽しめる場をつくる。11月にはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が、今年も世界最高峰の演奏を披露。地元音楽関係者に活動の場を提供しつつ、0IFならではの企画で大阪発の音楽・文化発信に注力する。